

グラビア2

生ゴミの再資源化で まちおこし

山梨・南部町
特定非営利活動法人
なんぶ農援隊





雨上がりの朝、里山に立つと草が匂った。葉についた水滴が今日を祝福する。草刈り機のエンジン音が響く。厚い雲間から時折顔をのぞかせる日の光。水田にはあめんぼが泳ぎ、畑をつがいの紋白蝶が舞う。そこには原風景ともいうべき「里」があった。

山梨県南部町で、EM菌による生ゴミの再資源化などに取り組んでいるNPO法人なんぶ農援隊の里山まつりが行なわれた。下草を刈り、藤桜を二十本ほど植え、階段を整備して里山まつり（「懇親会」）会場が整った。富士市から十人を超える中学生もやって来て、鶏、鹿、真竹などのバーベキューに舌鼓を打った。

なんぶ農援隊の発足は、平成十三年。環境問題には誰でも少なからず関心はある。各種の意識調査でも割合は高い。しかし個人で取り組んでいることとといったら、途端に数字は低くなる。「理解してもらえなければ実践で示す。実績を積み重ねて分かってもらえない」という同隊発足の立て役者鈴木俊輔さんが言うように、一貫してEM菌を使った生ゴミの再資源化の「実践部隊」として活動してきた。現在、専従の五名を中心に、EM菌を利用して生ゴミを土壌改良材、発酵飼料に資源化する処理を行なっている。給食センターや商店、老健施設など十三か所から月に十トン回収している。回収日は毎週月、木曜日。隊員がトラックで回る。「中にはご飯



として作ったままの形で出てくることもあるんだよ。ご飯を捨てちゃうんだよね、信じられないよ」と専務の深澤修さん。読者諸兄姉の中にも耳が痛い人は多いのではないだろうか？

目標は、町内全体で生ゴミを回収し再資源化することだ。全町で出される生ゴミの量はおよそ三十〜四十トンだという。今回収している量の三、四倍程度。必ずしも見果てぬ夢というわけではない。そのためにも、今後はモデル地区を作って講習会などを重ね分別の徹底をすすめていければと考えている。なぜなら分別が鍵となるのだ。以前、生ゴミの中にスプーンが混入していて、攪拌機のカッターを壊してしまった苦い経験がある。ちなみにカッターは一枚四万五〇〇〇円する。

それでも深澤さんは「自分たちの小さな動きで生ゴミが資源として再利用されていると思うと、嬉しいですよ」と目尻を下げた。EM菌活動に惚れ込んで富士市から移り住んで三年になる。他にも千葉、横浜から来た隊員もいる。

同隊のもう一つの活動の柱は、生ゴミから作った飼料を食べさせて鶏に産ませた大きな有精卵をとること。今では約千羽となった。しかし、鶏舎の中に入っても、その臭いからはとても千羽の鶏がいるとは思えない。ここでは、あの鼻を覆いたくなる臭いがなく、糖味噌のような甘いにおいがする。鶏の餌もEM菌を使って作っ



■連絡先 NPO法人なんぶ農援隊
山梨県南巨摩郡南部町本郷8321 電話 05566-4-3535

たものだが、また鶏糞もEM菌を使って肥料として利用されている。

ここでとれた卵は、地元商店街の空き店舗対策で建てたふるさと館（運営を同隊が受託）や道の駅、町外のスーパーなどで月一万五〇〇〇個が売れる。今では供給が追いつかなくなる一歩手前というほどの人気だ。庶民が毎日食べられる価格で、安全で、町の特産品としていき、活力あるまちづくりにつなげていく、というのが同隊の考えるところだ。

EM菌肥料を使ってとれる食べ物は、大豆にパセリ、お米にお茶等々。味やにおいにクセがないのが特徴。米作りも二年目になる。「昨年少素人が初めて取り組んだが、台風が来たときに、他のみんな倒れたけど、うちの稲は少し倒れただけで次の日にはまた起きあがっていたよ」と鈴木さん。EM肥料の威力を遺憾なく示した。

しかし、肥料を肥料として与えると、必要以上に栄養を吸い取ってしまうという。これは人間も同じだよと鈴木さんは言う。

へド口で有名になった田子の浦港が、今残留ダイオキシンなどでまた汚染されている。そこで将来的にはEM菌で浄化しようというプロジェクトが進んでいる。「これを成功させて『プロジェクトX』に出るといふ壮大な夢を描いているんですよ」と鈴木さんは言った。